

## 注

- 1 「古九谷」の名称は、大正から昭和初期にかけて陶磁器の研究者や愛好家の中で広まったもので、江戸初期に加賀の九谷で生産されたと目されるやきものに対しての呼称であった。この頃より「古九谷」を青手、祥瑞手、五彩手、吸坂手などの様式に分類して研究・愛好されてきた。しかし、1950年頃より「古九谷」の生産地が有田であるとの説が提唱され始め、1980年代には生産地を表す語ではなくやきものの様式名として「古九谷様式」の名称が使用されるようになった。しかし、「古九谷様式」の語に対する問題点は多く（注2）、近年では有田で生産されたものについては「初期色絵」の語が用いられるようになってきている。
- 2 今井敦2022「『古九谷様式』再考」『開館20周年記念 特別展 古九谷の多様性とハレ』石川県九谷焼美術館

## 謝辞

この度の修理と科学分析、保存箱製作にあたっては、下記の皆様にご協力いただくとともに、貴重なご助言および資料の提供等をいただきました。記して感謝申し上げます。

梶山博史、川合加容子、北野珠子、黒沢愛、小西真奈美、鄭銀珍、新免歳靖、高野欣也、都築由理子、二宮修治、樋口智寛、三浦麻衣子、水本和美、守屋雅史、藤原友子、横山梓

（敬称略、五十音順）



箱内に納めた状態



展示台（下可板）

### まとめ・課題

当館では陶磁器の修理は長年行われておらず、筆者としても担当する作品を修理に出すのは初めてのことで、全くの手探りの中での実施であった。そのため多くの方に情報提供やアドバイスをいただきながら、契約に至るまでかなりの時間を要することとなった。その中で、第三者（学識経験者）として北野氏をお迎えできたことや、新免氏のグループに分析をお引き受けいただけたことは本当にありがたいことであり、多くのことを勉強させていただいた。しかし、筆者の経験や理解の不足による反省点も多い。

今回の修理で不可逆性の素材を使用したのは、国立博物館をはじめとする他館の修理でも使用の報告がある素材であることに加え、修理者の経験を信頼したからであり、また修理者が使用したことがない素材を提案することで生じるデメリットへの危惧からである。しかし、もっと北野氏、繭山氏と相談をしておけば、文化財修復における最新の研究を反映した選択肢があったのではないかと思う。また、1.《色絵 牡丹文大皿》の貫入の染みを除去してしまったのも、北野氏のご助言をうまく生かせられなかった点である。貫入の染みは本作が出土物であった可能性を示す痕跡と言えるが、展示の見栄えなどを優先してしまった。修理後もわずかに染みが残っているのが幸いだが、記して記録したい。蛍光X線分析においても、直前に機器の不具合があり、もともと予定していたものとは異なる機器を使っただけの実施となったため、データの考察に難儀したと伺った。蛍光X線分析について筆者の理解が不足しており、安易に依頼しすぎたと反省している。

一方で、デジタル顕微鏡での観察ではとても興味深いデータが得られた。紫絵具の部分にのみ焼成時に溶けきらなかった夾雑物と考えられる黒い粒子が散っていたり、表面に無数の擦過痕があったりすることが分かったのである（口絵 10、11）。これらについては、今後ほかの作品の顕微鏡観察を行い比較検討することで、これらの特徴がもつ意味や原因について考察できるものと思う。今後の課題としたい。

今回の修理と科学分析では多くの反省と課題がみつかった。今後、この経験を生かしていきたいと思う。



修理前



欠損部の再生後・補彩前 (②)

3. 《<sup>りよくゆう そくれんもんまめがたまくら</sup>緑釉 束蓮文豆形枕》(口絵8) 中国・磁州窯系 金時代・12～13世紀 大阪市立美術館蔵

高10.0cm 幅35.5 cm 奥行23.9 cm 上面34.2 × 21.5 cm 底部31.3 × 20.2 cm

桐箱制作：美術木箱小島

【作品の概要】

緑釉を施した豆形の枕。枕面には蓮の花や葉、慈姑<sup>くわい</sup>をブーケにした文様、側面には唐草文をあらわす。枕面の文様は束蓮文と呼ばれ、良縁や子孫繁栄を意味する吉祥文様である。素地に白土で化粧をしたのちに緑釉を施しているが、文様を彫った部分は地の灰褐色の素地と釉薬の緑が重なるため黒くなり、くっきりと文様が浮かぶ。

【作品の状況】

緑釉は枕面から側面の下半まで施されていたが、側面の釉薬はかなり剥落している。この剥落は進行中であり、作品を出し入れするたびに梱包材である薄葉紙<sup>うすようし</sup>と擦れて、小さな釉片が落ちてしまう状況である。

【箱の製作について】

もとは本作も修理を計画していた。しかし、側面の前面の釉薬が最も剥落しているのは、枕として使用されてきた状況を表しているものであり、また経年劣化も作品の持つ特性や歴史であるため、修理をするよりも薄葉紙で擦れることのない箱の制作をしてはどうかと北野氏よりご助言いただいた。さらに、修理した場合、釉薬に剥落止めの樹脂を浸潤させるとどうしても素地部分に染みができてしまうことが分かったため、修理は取りやめることとした。

桐箱の制作にあたっては、美術木箱小島の小島登氏（美術工芸品保存桐箱に係る選定保存技術保持者）・秀介氏とご相談しながら箱の形状を決定した。すなわち、作品が動かないように当て木を取り付けた下司板<sup>げすいた</sup>をそのまま展示台として使用できる形状とした。また、下司板には展示することを考慮して艶消しの黒漆を塗布した。これにより、作品に全く触れない状態のまま、展示も保管も可能となり、釉薬の剥落の進行を緩やかにできるものとする。

摘されており、時代・産地の判断が難しい<sup>(2)</sup>。

作品の制作年代・生産地を検討するうえで科学分析は有効な研究手法の一つと考えられる。本作の場合は器形などから有田で制作された伊万里焼とみているが、修理の工程で破損した断面が露出するため、科学分析を行う良い機会と考えた。そこで古九谷研究におけるデータの蓄積に少しでも寄与するため、科学分析を実施することとした。調査にあたっては新免歳靖氏の研究グループに素地と釉薬の蛍光X線分析とデジタル顕微鏡による観察を依頼した。分析結果については新免氏による別稿をご参照いただきたい（本紙p.60（13）～51（22））。

## 2. 《白地黒搔落<sup>しろじくろかきおとし</sup> 鳥樹文如意頭形枕<sup>ちょうじゅもんによいとうがたまくら</sup>》 中国・磁州窯系 金時代・12世紀 大阪市立美術館蔵

高18.0cm 幅30.3cm 奥行26.5cm 底部14.6×14.8cm（修理後）

修理者：繭山晴観堂

修理期間：2023年9月～3月

### 【作品の概要】

頭を乗せる面が如意頭形の枕。花樹の枝にとまる<sup>は</sup> 呷々鳥<sup>はちょう</sup>の図をあらわす。呷々鳥は八哥鳥ともよばれ、吉祥鳥として知られる。文様は影絵のように白と黒のコントラストがはっきりとしているが、これは灰色の素地に白土をかけてボディを作ったのちに絵筆で黒く文様を描き、さらに羽や葉脈などの細部を引搔いて削り落とすことで表されている。

### 【修理前の状況】

如意頭形に作られた枕面の右側が大きく欠損する。そのほかにも枕面の縁には小さなカケがある。欠損部の素地の断面に空洞のふくらみがあり、素地に混入した空気が焼成中に膨張し、もともと割れやすい状態となっていたものとみられる。過去の修理で作成した石膏の接合片が付属するが、すでに接着が外れた状態であった。1940年購入以後の修理の記録は残されておらず、欠損・修理の時期は不明。



素地に混入した空気層

### 【修理の方針】

基本的には上述の《色絵 牡丹文大皿》と同様の方針とした。欠損部については、付属する接合片を再利用した。文様の補彩については、中国河北省邯鄲市の磁州窯博物館で所蔵されている陶枕片の呷々鳥文を参考とした。

### 【修理の工程・仕様】（修理後の写真は口絵7）

- ①黄変し染みが生じた旧修理による接合片の補彩等を除去・脱色。
- ②旧修理の接合片を芯とし、石粉を混ぜたエポキシ樹脂にて欠損部を充填・再生。
- ③再生した部分にエポキシ樹脂と顔料の混合物で釉薬・鉄絵を補彩。
- ④補彩の上にウレタン樹脂を塗布し色彩の調整および補強。

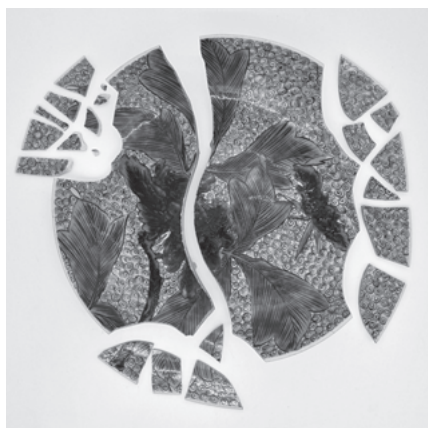
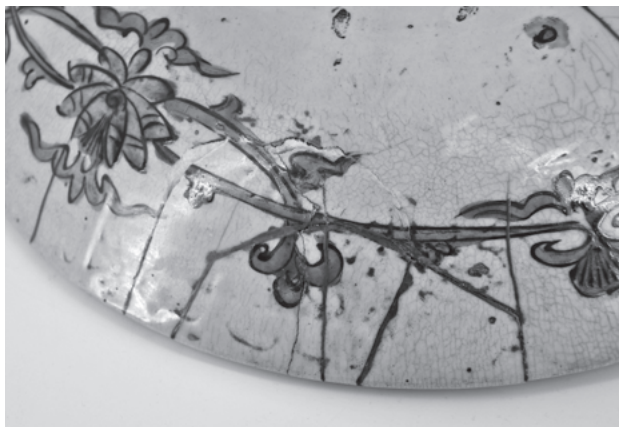
して色をなじませる方法もあるが、本作では修理部分分かる程度に接着部分のみに補彩することを徹底した。そして修理にあたっては、文化財保存修復の基本（処置の記録、修復部分の可視性、修復に使用する試薬や修復材料の物質や素材の可逆性、修復対象作品と修復に使用する試薬や修復材料の物質や素材の適合性）に基づいた修理方法であることを修理者へ求めた。ただし、修理者である繭山晴観堂の繭山悠氏より一部には不可逆性の素材を用いる提案があり、当館学芸員が使用方法などを確認し、修理者の修理の実績や経験を踏まえ、使用を承知した。

#### 【修理の工程】（※修理後の写真は口絵5、6）

- ①剥離剤を用いて旧修理を除去。陶片断面に残留した微粒子と染みを脱色。
- ②破損部、欠損部及び<sup>ひび</sup>罅に石粉を混ぜたエポキシ樹脂を充填。
- ③接着部をエポキシ樹脂と顔料の混合物で補彩。
- ④補彩の上にウレタン樹脂を塗布し色彩の調整および補強。



修理前



旧修理除去後 ①



接合後・補彩前 ②

#### 【科学分析調査の経緯】

17世紀中ごろに作られた「古九谷（様式）」と呼ばれるやきものについては、生産地論争がある。紙幅の関係で詳細は割愛するが、発掘調査の進展により肥前地方の有田で生産されたことはほぼ確定的なものとなったが、加賀の九谷でも生産されていたとする説は根強く論じられ続けている。さらに、伝世品の「古九谷（様式）」の中に19世紀の九谷焼である「再興九谷」が混同されている可能性も指

〈報告〉

# 大阪市立美術館所蔵陶磁器の修理および 保存箱の製作等について

杉 谷 香代子

2023 年度、2 件の館蔵陶磁器作品の修理を行い、そのうちの 1 件については陶片の科学分析調査も実施した。また、2024 年度には保存箱の製作を行ったので、併せて報告する。

## 1. 《色絵 牡丹文大皿》 伊万里焼 江戸時代・17 世紀 大阪市立美術館蔵（田万コレクション）

高 8.8cm 口径 41.6cm 高台径 16.8cm（修理後）

修理者：繭山晴観堂

修理期間：2023 年 9 月～3 月

### 【作品の概要】

内面に上絵の緑・紫で牡丹を大きく描いた大皿。背景は黄地に渦文をびっしりと埋める。裏面は白地に緑・紫で花唐草文を描く。高台内中央に崩れた「福」字銘を黒線に緑で記す。銘の上には目跡と呼ばれる焼成時のハリ支えの痕跡が 1 カ所残る。

本作は、1650 年代頃に作られた伊万里焼の初期の色絵であり、いわゆる「古九谷（様式）」の「青手」に分類される作品である。高台径が口径に対して 2 分の 1 程度であり、口縁には縁錆を施さず白地のままとしており、青手としては比較的古いタイプといえる。ただし、青手の多くは内外面ともに緑や黄で塗りつぶして白地を残さないのに対し、本作では裏面を白地に花唐草文をとっている点で珍しい。

### 【修理前の状況】

大きく二つに割れ、口縁付近もいくつかの碎片になってしまったものを、金継ぎで修理された状態である。劣化のためか金継ぎ部分がへこみ、一部に罅割れが生じたり剥離したりしている。透明釉が施された白地部分には、口縁から腰にかけて貫入（釉薬に入った細かい罅割れ）が入り、茶色の汚れが染み込んでいる。1980 年に受贈以後の修理の記録は残されていない。

### 【修理の方針】

第三者（学識経験者）として北野珠子氏（東京藝術大学大学院美術研究科 文化財保存学専攻 教授）にご意見を賜り、以下のような方針とした。

美術館として作品を美しい状態で鑑賞いただきたいという思いはあるが、一見傷や汚れにも見える使用痕や保管状況に起因する痕跡、修理痕なども作品が持つ歴史であり重要な情報であるため、すべて消し去ることがよいとは言えない。また、修理の痕跡が分からないようオリジナルの部分にも補彩